

初版序文

近年、エビデンスに基づいた標準的治療法（evidence-based medicine：EBM）が様々な疾患を治療するうえで極めて重要であるということが広く認識されるようになりました。エビデンスに基づいた治療法とは統計学的な分析に裏打ちされた十分な科学的根拠に基づいた治療法を意味し、信頼に足るエビデンスを作るためには大規模な前方視比較研究が必要であるものの、その遂行は決して容易ではありません。循環器疾患などのように症例数の多い疾患では大規模スタディも比較的容易ですが、造血管腫瘍領域、特に症例数の少ない小児造血管腫瘍の領域では標準的治療法の確立は困難を極めてきました。そのような中で、世界的に多施設共同研究のグループが形成され、数少ない疾患をできるだけ集め、グループ内で同一のプロトコルを遂行することにより少しでも科学的根拠に基づいた治療成績を出そうとする努力が行われてきました。

わが国でも、小児白血病研究会（JACLS）、東京小児がん研究グループ（TCCSG）、小児癌白血病研究グループ（CCLSG）を中心に白血病、悪性リンパ腫に対してグループ研究が盛んに行われ、治療成績の向上が図られてきました。さらに急性骨髄性白血病、乳児白血病、悪性リンパ腫の一部に対しては全国統一プロトコルが実施され、多くの成果が得られています。最近、日本小児白血病・リンパ腫研究グループ（Japanese Pediatric Leukemia/Lymphoma Study Group：JPLSG）が設立され、より質の高い臨床研究を行うためにデータセンターを中心とした基盤整備が進み、従来のグループを超えた全国共同治療研究が開始されています。また、小児白血病・悪性リンパ腫の中には極めて稀な病型も存在することから、このような疾患に対しては国際的な共同研究も始まっています。

本ガイドラインは、日本小児血液学会がん診療ガイドライン委員会のメンバーが中心となって、様々な小児造血管腫瘍に対して現時点での標準的治療法について記載していただきました。小児白血病・悪性リンパ腫の中には、エビデンスに基づく標準的治療法と呼べるものが存在しない病型も存在しています。また、この領域は常に共同研究が継続して遂行されており、治療法が新薬の開発に大きく影響されることから、今日の標準的治療法は2～3年後には標準的治療法でなくなってしまうかもしれません。本書はわが国のグループ研究の中心となって第一線で小児白血病・悪性リンパ腫の治療に当たってこられた先生方が、現時点での標準的治療法あるいはそれに準ずるような治療法をできるだけ解りやすい形でお書きいただきました。その御苦勞に心より敬意を表したいと思います。本ガイドラインが小児血液・腫瘍を専門にしている医師だけでなく研修医、看護師、薬剤師など、さらには患者さんやその家族の方々にも利用され、一人でも多くの小児造血管腫瘍患児の治療に役立つことを願ってやみません。

平成19年9月

日本小児血液学会理事長

京都大学大学院医学研究科発達小児科学

中畑 龍俊